

キンモクセイの香り

桑高同窓会長 西羽 晃

毎年、9月の末になると、暗い道を歩いていると、キンモクセイの香りが漂ってくる。桑高の正門横にキンモクセイの生垣がある。普段は気づかずに通り過ぎるが、この時期になると、キンモクセイの生垣だと気が付く。私が通学していたころは学校の周囲は松が並んでいた。その名残りの松が1本、正門横に残っている。



私が初めてキンモクセイに出会ったのは、1944（昭和19）年だったと思う。この年7月まで私は神戸市灘区に住んでいたが、空襲が激しくなる前に一家を挙げて疎開することになった。子どもだったので、詳しいことは知らなかったが、後に聞くと、空襲の際に避難場所を確保するための空地が必要なので、家屋を強制的に取り壊して、田舎に疎開することになった。疎開先は神戸の六甲山を越えた有馬郡有野村唐櫃であった。当時の唐櫃は茅葺の家が多い、純然たる農村であった。子ども心に珍しい風景を見、田畑の作物が成長する様子を興味深く見た。

9月の新学期から唐櫃国民学校（当時は小学校とは言わなかった）2年生に編入した。9月の末ころ校門付近から甘い香りが漂ってきた。これがキンモクセイとの出会いであった。校門を入ると奉安殿があった。毎朝登校すると、まず奉安殿で最敬礼をしてから校舎に入るのである。奉安殿には天皇・皇后両陛下の御真影（写真）と教育勅語が納められていた。式日には校長先生が教育勅語を取り出して、講堂で全校児童の前で、奉読した。高学年の児童は教育勅語を全部暗記させられたが、私はまだ2年生だったので、覚えぬ間に戦争は終わって、教育勅語も廃止となった。

唐櫃は寒いところで、雪も深く、冬になると藁靴を履いて通学したし、坂の上の子たちは自家製の竹スキーで通学していた。1945年の神戸空襲は六甲山越しに火の手が見えるのが見え、すさまじい轟音も響いてきたが、何も心配せずに高見みの見物をしていた。しかし、神戸で経営していた紙管工場が全焼してしまった。工場は敗戦前に愛知県十四山村へ移って、父だけが単身で赴任した。

戦争が終わった翌年に工場は桑名市の旧東洋紡績の桑名工場跡へ移った。私

たち家族は1947年3月に桑名市新地に移ってきた。この工場も桑名空襲で大半が焼けたが、焼け残った一部の建物を利用することになった。工場は揖斐川に面しており、桑名城の石垣が巡っていた。紡績時代には原料の綿花を四日市港から小舟で運んできたので、石垣の一部を崩して通路が開けてあって、普段は木の扉がついていた。小さな栈橋もあった。その栈橋の上で花火を見物したこともあった。

私は1959年に紙管工場に就職した。その年9月26日に伊勢湾台風が襲ってきた。自宅は離れたところにあり、大きな被害もなかったが、工場は揖斐川の扉が破れて浸水してしまった。翌朝には水は引いたが、一時は1メートルほど水に浸かった。紙管とは円錐形の紙製品であり、原料も半製品・製品もすべて紙なので、水に浸かって使い物にならず、大損害を受けてしまった。

翌日から後片付けに追われる日々となり、雑然とした風景となった。ふと気づくと芳香が漂ってくる。工場の中に1本のキンモクセイがあり、時期がきたので、花を咲かせたのである。泥まみれのなかでの一服の清涼剤であり、強い生命力を感じさせてくれた。キンモクセイに励ませられて、その後の復興に励んだ。しかし台風の被害のため、紙管工場は同業者との競争に遅れてしまった。

私の人生の中で大きな出来事が太平洋戦争であり、伊勢湾台風である。いずれもキンモクセイの香りとともに思い出す一コマである。戦争・台風どちらの災害にも人命の危機に瀕せず、生きてこられたのは有り難いことである。